

Title	『哲学』特集号によせて
Sub Title	For the special issue of philosophy
Author	小谷津, 孝明(Koyazu, Takaaki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲学 No.91 (1990. 12) ,p.3- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『哲学』特集号によせて

文学部長 小 谷 津 孝 明

この度、文学部開設百年を記念して、三田哲学会が機関誌『哲学』第91輯を特集号とする企画をたてられ、就中、巻頭に哲学専攻の松本正夫・沢田允茂・大江晁・中山浩二郎4名誉教授による座談会“三田哲学百年を語る”，および各専攻名誉教授によるエッセー“三田哲学と私”を収録刊行することになりましたことは、真に意義深いことと思ひ、慶賀にたえません。

明治23年(1890)慶応義塾に大学部創設ということで、理財科・法律科と並び文学科(文学部の前身)が発足致しました。当時の開講科目を一瞥しますと、英米文学史・歴史・和文学・漢文学・修辞学・哲学史・論理学・倫理学・心理学・教育学・審美学などが主です。“liberal arts”として哲学系の科目が中心の編成であったことが分かります。

その後20年を経た明治43年、より専門的な教育をとということで、文学科は文学・史学・哲学の3専攻に分かれました。そして各専攻では、独自の学会を持って学問の分化に応じた活動の実効を期そうという気運が起ります。哲学専攻では、当時学科主任をしていた川合貞一が中心となって、三田哲学会を発足させました。したがって、本年は三田哲学会創立八十周年記念の年でもあります。

ついで大正9年(1920)、大学令にもとづき、塾が文学、経済学、法学、それに医学を加えた四学部からなる総合大学として新発足することになりましたとき、文学部は従来の「専攻」という呼称を「学科」に改め、「専攻」はより下位の分類に当てることにしました。結果として、哲学科は(A)認識論および哲学史、(B)心理学および教育学、(C)倫理学および社会学、をそれぞれ主とする3専攻をもつこととなります。

このような学事整備が進む中で、三田哲学会はおそらく独自の機関誌を持つことを切望していたと察せられますが、学会誌『哲学』の創刊は大正15年（1926）になります。それまで哲学科系教員の学術発表は理財・法学・政治各学科を含めた総合学術誌である『三田学会雑誌』および、三田文学会の機関誌である『三田文学』などになされていました。『哲学』第1輯には上述の川合貞一（哲学倫理学）をはじめ、船田三郎（哲学）・板垣鷹穂（美学美術史）・青木巖（美学）・横山松三郎（心理学）らが筆を執っています。

やがて第二次大戦の終結を迎え、各学科は新学制改革に依拠しつつ専門化と再編成を進め、哲学科は哲学・倫理学・美学美術史学の3専攻を集めました。昭和38年には社会・心理・教育学専攻が一つの学科として独立していきました。

この間も三田哲学会は絶えずこれらの専攻の教員及び学生をメンバーとして『哲学』を刊行し続け、今日を迎えている訳であります。「草創（創業）と守文（守成）いずれが難しき」とは、唐の太宗これを用いて以来、人口に膾炙した言葉ですが、どちらかといえば陰性的苦勞が強られる学会誌の守文を継承的草創の精神で、三田哲学会が維持し続けてこられたのは真に大変なことだったと思います。

ところで「哲学は万学の母」と申します。これを云うとき、巨視的には二つの重要な機能が哲学に求められているように思います。一つは正に諸学をより一層発展させ、あるいは新たな学問を生み出す創造的・方法論的母体としての機能であり、他の一つは可能な世界観の精ちな構築とその中で人類の向かうべき道を模索する思想的機能です。

個別化によって深化・発展してきた諸学が更に一層発展するためには、哲学それ自体が個別科学として前者の機能を一層発展させることが要請されまじょうし、また諸学の中に浸透し、いわば諸学の「根」となりゆくことも必要でしょう。また、新たな学問——たとえば認知科学といった——

の樹立のためには、諸学横断的・総合的思考と方法論の提供は必須です。

一方、第二の思想提供の機能について言えば、多様な価値観が錯綜し、ぶつかりあう現代においてこれほど求められているものはないであります。しかもそれは学問の世界から出て、民族、国家、社会、そして市井の人々の中に生きていくかたちをとることが何よりも必要なことではないでしょうか。

そのような意味で、同学・異学の徒が多くを思索し、発表・討論する場として、今後三田哲学会およびその学会誌『哲学』が果たすであろう役割は一層大なるものがあると思います。最後になりましたが、関係者諸氏のこれまでのご苦勞に心から感謝申し上げますとともに、三田哲学会および『哲学』の今後の一層のご発展を祈念し、挨拶にかえさせていただきます。